

財団法人健和会 大手町病院 内視鏡室

【住所】福岡県北九州市小倉北区大手町15-1 【病院長】西中 徳治 先生 【病床数】635床
 【内視鏡検査・治療総数】約 5,000 件：上部内視鏡検査 約 4,200 件、下部内視鏡検査 約 600 件、
 ERCP 約 120 件、その他 約 500 件（胃瘻造設 約 150 件、胃瘻交換 約 300 件、緊急内視鏡 約 50 件）
 【スタッフ】医師15名（常勤8名、非常勤7名）、看護師（救急外来兼務）2名、臨床検査技師（内視鏡技師）5名
 【スコープ本数】上部用5本（うち経鼻内視鏡1本）、下部用3本、十二指腸用2本、気管支鏡4本

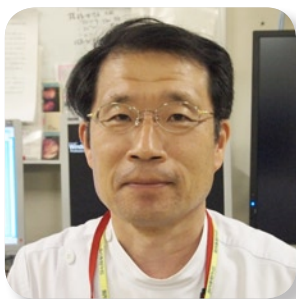


『胃瘻交換連携パス』を活用し 地域全体で胃瘻患者をサポート

地域密着型の急性期病院として 年間約30,000人の救急患者に 高度救急医療を提供

北九州市の中心に位置する大手町病院は、小倉北区全域と南区の一部を医療圏とする急性期病院です。現在の病院建物は1984年6月にオープンしましたが、そのデザインはシティホテルのような明るく洗練された雰囲気、当時から他の医療機関に先駆けて患者ホスピタリティの向上に尽力してきました。

同院は前身の健和総合病院時代から特に救急医療に力を入れており、年間で約30,000人の救急患者を受け入れています。1次救急から心肺停止状態患者の救急搬入などの3次救急医療を365日24時間体制で提供しており、地域住民から厚い信頼を得ています。救急車の搬送件数も年間6,000件を超え、現在では入院患者の約7割が救急外来を経由しているそうです。消化器疾患の救急に対しても、消化器内科医、消化器外科医、内科医が連携し、あらゆる症状に迅速に対応できるような体制を整えています。



副院長 久田 裕史 先生

専門性の高いスタッフと連携したチーム医療で 安全・安楽な内視鏡検査を実践する

同院の内視鏡室は救命救急室のすぐ近くに配置され、救急入口からすぐ内視鏡室へ患者搬送が可能なレイアウトになっています。内視鏡室は内科と外科が合同で運営されており、常勤医師8名、非常勤医7名、臨床検査技師5名と、救急外来を兼務する看護師2名の構成になっています。副院長の久田裕史先生は、「5名の臨床検査技師は内視鏡室常勤で、全員内視鏡技師の資格を取得しています。内視鏡診療に関する知識と経験が豊富なため、我々医師を的確にサポートし、質の高い検査や治療に貢献しています」とご説明いただきました。

内視鏡室では、患者様に安楽に検査を受けていただくため、ミダゾラムを使用したセデーション下で行う上部消化管検査を紹介しています。患者様のセデーションに対する理解を深めるため、ポスターを作って前処置室に掲示し、患者様に案内しているそうです。また、経鼻内視鏡も導入しており、健診の場合は経鼻内視鏡による検査も行っているほか、胃瘻交換時の確認にも利用し患者様の負担軽減に役立っています。

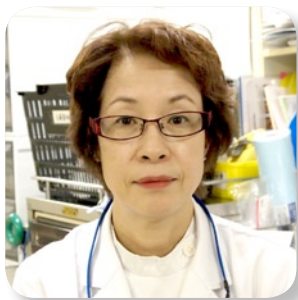
▶次ページへつづく



医療の質と安全を確立するため
スタッフ全員がリスクマネジメントを徹底

同院は2011年に病院機能評価ver.6と品質マネジメントISOである「ISO9001」を更新し、また環境ISOの「ISO14001」を新たに取得するなど、安全管理への取り組みを高い意識で行っています。また、院内の医療安全委員会が毎月「リスクマネジメントニュース」を発刊し、スタッフ一人ひとりが常にリスクマネジメントの意識を持って業務に当たるよう徹底されています。

内視鏡室では内視鏡技師が中心となって感染管理にも力を入れており、スコープの洗浄・消毒は消化器内視鏡技師会のガイドラインに従い実施しています。内視鏡技師の真野弘美さんは、「まずスコープの構造がどうなっているのかを理解してもらい、洗浄・消毒方法のマニュアルを作成して室内に掲示し、いつでも参照できるようにしています。当院は環境ISOを取得しているので、待機電力の削減のため内視鏡室でも電子カルテ以外の電気製品、内視鏡機器類やベッドなどのコンセントを全て外してから帰るようにしている等、環境への配慮を徹底していますが、処置具に関しては医療の質と安全の保証を最優先し、可能な限りディスプレイ製品を使用しています」とご説明いただきました。内視鏡室の検査や治療は全て内視鏡技師が直接介助していますが、配属1年目のスタッフには必ず真野さんが後ろについて手取り足取り教えるマンツーマン体制をとるなど、スタッフの教育にも熱心に取り組んでおられるそうです。久田先生は、「内視鏡技師の高い専門性と経験により限られた人員で安全且つ効率の良い診療が可能になっています。今後はぜひ看護師にも内視鏡技師の資格を取得してもらい、休日や夜間など人手が不足する時間帯にもあらゆる治療を患者さんに提供できるような体制を整えていきたいです」とお話をいただきました。



内視鏡技師 真野 弘美 さん



内視鏡室のみなさん

胃瘻のトラブル対策と地域連携強化のため
『胃瘻交換連携パス』を運用

内視鏡室の特色の一つとして、胃瘻に関する積極的な取り組みが挙げられます。造設手技は年間約150件施行しており、また交換手技は年間約300件に上ります。久田先生は、「当院では1987年に初めて胃瘻造設を行いました。当時はまだ保険制度が整備されていなかったため、限られた症例にしか適応できませんでした。しかし、当院では昔から診療科の垣根がなく他科とのコミュニケーションが密接に行われてきたため、自然と胃瘻の有用性についての認識が広まり、年々症例数が増加していきました」とご説明いただきました。2003年には外科医が中心となって院内にNSTを立ち上げ、病棟毎にチームを配置して積極的に活動しているそうです。また、胃瘻を造設した患者様やご家族に安心して胃瘻を使った栄養管理を行っていただくため、近隣の長期療養型病院や在宅医療を行っている開業医、老人ホーム等との地域医療連携も進んでいます。2007年には『胃瘻交換連携パス』を作成し、適切な時期に確実に胃瘻交換を行うために運用しています。こうした取り組みを続けているおかげで、これまで大きなトラブルはないそうです。久田先生は、「今後はITを用いて胃瘻患者のデータ管理を行うとともに、NSTを通じて多職種からの様々な意見を集約し、胃瘻の適応自体についても患者さんの生活環境や病態に応じて新たな視点で再考していきたいと思っています。また、これまでは胃瘻や緊急内視鏡を積極的に行ってきましたが、今後は健診による疾患の早期発見と早期治療にもさらに注力していきたいです」と、今後の展望についても触れていただきました。